

俺の元に來たしごでき一匹狼が、実は超
敏感體質だったのを知ってしまい、
流れで下の世話の面倒を見てやることにな
った

体験版

面倒見よし隠れS年上リーマン×クール系ツンデレ敏感體質年下リーマン

攻め：更井（さらい）

受け：見口（みぐち）

要素：乳首責め、ドライオーガズム

「アンタの、アンタのせいで...！」

人生は、まさかAの事象がBの出来事に繋がるなんて、ということがよくある。

ことわざでも、風が吹けば桶屋が儲かるとか、人間万事塞翁が馬といった言葉が

あるように、一見すると関係性のないことからミラクルは起こりうると。俺よりずっとずっと昔を生きた人々も教えてくれている。

「責任取れよ！」

でも例えば、その奇想天外な出来事が、まさか会社の後輩の秘密を知るきっかけになってしまったなんて。しかもまるで、三角関係の末にこじれた男女関係で最も悪い男役みたいな台詞をあびせられることになるなんて。一体誰が予想できるだろうか。

ついでに言うなら、泣きつく女性から胸に額を擦りつけられるような甘い展開じゃなくて、年下の男からキレ気味で壁に押し付けられ、胸倉を掴まれるというシチュエーションだ。なんだこれは。責任を取るとはどういう意味なんだ。分からない、でも多分、悪いことをしたのは俺なんだろう。

だから俺は、こう言うしかなかったんだ。人生で初めてのことにパニックだった俺は、他に言葉が思いつかなかった。

「じゃ、じゃあ…。俺はどうしたらいい？」

今思えば、この時既に息子は馬から落ちていて、桶屋には風も吹いていた。始まった出来事がどこに着地するか、自分でも予想できない状況は整っていたんだ。

それでも、目の前の男が脅しのように突きつけてくる言葉が、俺の人生の中である意味最も怖い台詞になるなんて。

「抱けよ。アンタが俺のこと」

そんなの絶対、予想できるわけじゃないか。



3月の中ごろ。来季の人事異動の兼ね合いで、うちの部署から一人いなくなり、新しい人が一人来る内示が発表された。バタつく時期だが、引継ぎの挨拶も兼ねて、3月下旬に向こうが顔を出しに来るらしい。営業一課として引継ぎの手伝いをするのは当然だが、最初のうちは不慣れだろうからと、俺がサポートとしてつくように課長から指示を受けた。ということで、俺は少し緊張しながらも、新たなメンバーとなる見口の到着を会社のロビーで待っていたんだが。

「あなたが更井さんですか」

「君が見口君？初めまして、更井です。これからよろしく」

「まあまだ完全に異動してませんけどね。もう意味なくなりますけど一応名刺です」

「あ、どうも...」

目の前に現れた後輩君は、聞いた話だと俺より7つ年下の28歳。身長は自分と比べて少し低いけど、170センチくらいはありそうだ。すらりとした体型と中性的で綺麗な顔は、営業する際、大きな武器になるのだろう。ただ、彼は見た目が大変美しいにも関わらず、態度があまりにもかわいくない。お前、よくそれで営業やれてるなと喉まで言葉が出かかる。うちの部署から出ていくのが彼とは真逆で愛嬌のあるタイプだから、取引先との関係が余計に心配だ。

けれどこの見口、噂に聞くと前の部署での営業成績は常にトップを走り続けていたらしい。確かに雰囲気からして、仕事ができそうなタイプではある。ちょっと棘のある口調も、もしかしたら緊張しているだけなのではと思い、軽くスキンシップがてら握手でもしようかと手を伸ばしたが完全に無視された。空気を掴むだけになった手をひっこめながら、彼の不愛想は緊張によるものではないことを悟る。

その後は配属先になる営業一課で挨拶まわりをしていたが、課長を見てもきりりとした目つきのままだった。ただし課長とは握手をしていたので、ある程度社交辞令をわきまえてはいるようだ。あとは、笑顔など一つもないにも関わらず、彼を遠目に見ていた女性社員ですら振り返るレベルの顔面なのは、単純に羨ましくもあった。

だが最も驚くことになったのは、彼がうちに正式に配属されてからの、無双のような営業成績だ。さすがに入りたての4月は苦戦していたようだったが、ゴールデンウィークを挟んだというのに5月の成績は1位と僅差、6月には逆転、7月には他の追従を許さずと、ぐんぐん上に伸びていくグラフは圧巻の一言。月末が近づいて、更に伸びる数字に思わず俺も声を上げてしまった。

「すげえなコレ。人間が出せる数字かよ」

「俺も時々、周りをもっと頑張ればいいのにと思いますよ」

「そういう口の悪さがお前を人間に戻してくれてるよなあ」

その横で同じように営業成績を見ていた見口は、相変わらずクールな横顔を見せている。こちらに来てからは少し明るめに髪を染めたところ以外、彼は出会った時からほぼ変化がなかった。性格はご覧の通りキツいままで、会議の時すらほぼ喋らず、口を開けば的を得た言葉を数個言って終わり。飲み会は基本断る。過度なボディタッチはもちろん、人とのスキンシップをひどく嫌がるので、周囲と距離ができて孤高の一匹狼になっている。世話役として任命された俺が、唯一まだ話せるラインにいるらしい。

「週末に祝勝会あるけど、お前は参加するんだよな？」

「普通に行きませんけど」

「見口のおかげで酒が飲めるってのに。もう少し付き合いよくしといた方がいいぞ？取引先とかとどうしてんの？」

「そういう時には行きますよ。さすがに断れないでしょ」

「そういう分別があるならこっちのにも参加しとけよ。仲良くしといた方が得だろ、何かと」

「忘年会くらいは行きますよ」

「年に1回しかないんだよなあそれは」

だが俺とて、多少話ができるだけで、特別に見口と仲がいいわけではない。絶妙に距離感のある会話を少しだけすると、全くこちらに顔を向けないまま、彼はチラリと時計に目をやった。そしてそのまま、スタスタと自分の席に行ってしまう。全く距離の縮まらない会話に終わったことにため息をつきながらも、俺もいつものことかと諦めて自分の席に戻った。

けれど、完璧人間の彼とて繁忙期には繁忙期なりに忙しくなるようだ。これは終電を逃すしかないなとげんなりしながら残業していると、俺の部署に残っているのは自分と見口の二人になっていた。

「見口がここまで残るの珍しいな」

「俺も好きで残ってないですよ」

「それは間違いない…」

はぁ、と疲労をにじませた息を吐くと、彼もぐるりと首を回して、指で眉間を揉みこんでいた。これだけパソコンと長時間にらめっこしていたら、目も疲れるし、首も肩もしんどいだろう。どうせもう帰れないならここで一息ついてもいいかと、俺は伸びをして一度席を立つ。

「も～、今日は帰れんかもしれん。俺は諦めたけど見口は帰れそう？」

「最初から諦めてますね。着替え持参してきてるんで、今日」

「泊まる気満々じゃんお前…。俺も下着買ってくるかなあ。コンビニ行くけどお前どうする？」

「もうちょっと進めたいんで後で行きます」

「分かった。もし俺宛に電話きたら連絡してくれ」

「了解です」

どのみち夜食や飲み物は必要だろうと、俺も泊まりのための準備をするべくコンビニに向かった。ついでに、未だオフィスで頑張っている見口に差し入れも買っていく。好みは分からないので甘いものからコーヒーまで適当に買って、まとめて渡すことにする。

会社に戻ると、アイツはまだパソコンに向き合って、高速で指を動かしていた。集中力どうなってんだ、よくめげずに続けられるなと感心するが、それはそれで脅かしがいがある。クールな見口が驚いているところを一度も見た事がないので、今は絶好のチャンス。こそこそと背後に近づいて、俺はそっと人差し指で彼のうなじをなぞり上げた。

「首ががら空きだぞ見口～」

「っ、ひいいいっ！？」

その悪戯に、気持ちいいくらい見事な反応してくれたので、俺も思わず笑ってしまった。ぱっと首の後ろを手で押さえながら振り返った見口は、鬼の形相で俺を睨んでくる。

「アナタって人は...！くっしょうもない悪戯を...！」

「い、いやでも、そんないい反応が返ってくるとは思わずだな」

「不意打ちで触るのやめてください。嫌いになりますよ」

「お前に言われるとシャレに聞こえないって。あ、これ差し入れ」

子どもじみた声が出たのを恥ずかしく思っているのか、見口は耳まで真っ赤にしていた。色々反論したいのだろうが、あまり言い訳をし過ぎても墓穴を掘るので、悔しそうに睨んでくるばかりなのは少しかわいい。そんな彼に差し入れ用の袋を渡しながら、俺は見口のパソコン画面を見る。相変わらずシンプルながらも整った資料を作っていて、こういうセンスも抜群なんだよなと、彼の肩に顔を置くような形で話しかけた。そのときたまたま、逆の肩にも手を置いて、褒めるように淡く左右に動かしていたのは無意識だった。

「見口って、すっげ綺麗に資料作るよなあ。俺は一生かかっても無理だわ、このクオリティ」

「っ...！？っ、ッ！？」

「なんか専用のソフトとか使ってるの？そういうのケチらん方がいいって、前に言ってたもんな、お前」

「ふ、っ、あ、っ、...ッ！」

「なあんだよ静かになっちゃって。照れてんの？」

だが、見口は褒めているにも関わらずやけに静かだった。それを俺は、嬉しさを噛みしめつつも照れているのかと思い、にまにましながら彼を見る。けれど実際

の彼は、先ほどよりもっと顔を赤くしながら、なんなら目も潤めながら、小さく震えていた。きゅ、と目をつむった額に、じわりと汗が滲んでいる。

それを見た俺は、咄嗟に彼の体調不良を疑った。根を詰めて働いているし、弱音を吐かない見口だが、もしかしたらかなり高熱が出ていたのかもしれない。

「どうした見口？お前、まさか具合悪いのか！？ちょっと熱計らせろ！」

「は、ちょ、なにしっ...！？」

この場に体温計などという代物はないので、計るとしたら触診しかない。額同士をくっつけるのもどうかと思うので、分かりやすいのは首元だろう。緩めたネクタイの間、さっとボタンを外して、俺は彼の首筋に手を這わせた。

そう。俺はあくまで、体温を計ろうと思ったんだ。部下の具合が悪そうだったから。ただそれだけで、やましい気持ちなんかこれっぽっちもなかった。なのに。それなのに。

「あ、ひうううっ！？」

いつも仏頂面で、血も通っていないんじゃないかと思う見口から、とんでもなくエロい声が飛び出してきたもんだから。それを聞いて固まった俺を見ることもなく、彼が小さく震えながら、両手で口を押さえて前かがみになんかなるもんだから。

俺も思わず、なんかヤバいことをしたらしい、とだけは察した。でもどこか、人間とは好奇心に抗えない時があるもので。やめておけばいいのに、俺はついもう一度、今度は熱を計る意味合いを失った手を彼の首に伸ばしていた。

「ひ...ッ！？あ、や、いや、や、め、っ、っっ！」

「なあ見口、まさか、まさかお前」

「んく、う、や、あ、さわ、らな、あ、ッ、ひ、ううっ！」

びく、びくと、先ほど以上に身体を跳ねさせる見口を見て、なぜか俺も息が荒くなる。おいおい、職場で、しかも残業中の深夜に何をしているんだと自分でも思う。だけど、助けを求めるみたいに見てくる目に昂る。普段は警戒心丸出しで誰も近寄らせない狼が、耳も尻尾も垂れ下がった情けない姿を晒している。たまらないと思っていた。だからやめられないまま、とうとう見口が堪えきれず椅子から落ちるまで悪戯を続けてしまう。

「〜〜っ！も、やああ...っ！」

「お、おわ、わわわっ！？」

ガタンと派手な音を立てて椅子ごと床に転がっていった見口は、ガタガタ震えて丸まっていた。それを見て自分がやりすぎたことを悟ったが、パニックになるとどうにも正常な判断ができない。

どうするんだ、この状況。明らかに謝ってどうにかなるレベルを超えているし、しれっと俺だけ仕事をするわけにもいかない。助けようにも、見口をよくない状

態に持っていった張本人が「大丈夫か！しっかりしろ！」と言うのはおかしいだろう。どうする、とにかく空気を変えなければ。あれだ、ここが職場だから気まずいんだ。そうだ、まずは場所を変えるのはどうだろう。俺がコンビニに行ったように、お互いに気分転換になる場所にいけばいいじゃないか。

そう思った俺は、短い時間の間で俺たちにとって気分転換の出来る場所の候補として、どうせ徹夜ならシャワーでも浴びれるところがいいんじゃないかと思った。本当に断じて、やましい気持ちはなかったんだと、先に弁解しておきたい。

「あ、あ〜っと、そう、あれだな！多分俺ら疲れてんだな！お前も休憩取った方がいいって！気晴らしに風呂でも入りに行こう！つつつてもこの辺漫喫もないし、銭湯もないからさ、前に別のやつと近場のラブホ行ったんだけど、風呂広いしゆっくりできてよかったからさ！見口もそこに行こう！」

「はあ！？いいです、てか更井さんと一緒にラブホって、どんな冗談で」

「いいからいいから！着替えは鞆に入ってるのか？じゃあ荷物持って行くぞ！」

「ひいいっ！？」

半ばヤケだった。とにかく気まずいこの空気から逃げ出したかった俺は、ちょうど財布と携帯を持っていたので、コンビニの袋と見口の鞆を片手に、倒れた見口を立ててラブホへ向かう。ぐったりした彼は、腰に手を回していてもしんどそうだったが、もう深くは考えないことにした。

無人受付のホテルについて、適当な部屋を選んで部屋に入るまで、見口はわずかに息を吐けど、特に何も喋ることもなくついてきた。そして彼を引きずりながらカードキーで部屋の扉を開けると、典型的なデカイベッドのある空間が見える。

「よし、もう大丈夫だ！ここならゆっくり休め、るって、おわわっ」

気を張らなくてよくなったと思ったのか、どうにか歩いていた見口がずるずると地面に座り込んでいった。肩で息をする彼は、未だに苦しそうに見える。そんな彼と目線を合わせるためにじゃがみ込んで、俯く見口に声をかけた。

「見口...？」

けれど、俺が彼の顔を見る前に、ギラリと鋭い視線が刺さったかと思えば、胸倉を掴まれて壁に押し付けられていた。ガン、と後頭部がぶつかって尻もちをつく、痛っ、と言う声がかき消される声量で見口に怒鳴られた。

「ふざけんなっ！くそが、何してくれてんだ...！アンタが触らなければ、俺は、俺は...っ！」

「い、や、それは熱を計ろうと」

「その後も触ってきたのはどう説明する」

「...さ、触りたくなかったから？」

「その言い分で俺が納得するとでも？」

「や、悪気はなかったって！本当に心配だったんだって！ほら、今も耳まで真っ赤だし！」

「っ、ひ...！？」

ぎりぎりと俺を締め上げる手つきは、本気で怒っている人間のそれだった。ただしどことなく力が入っていないし、顔が赤いのも怒りからくるものとは少し違うものが混じっている気がする。既に、彼がこうなっている理由をどことなく察してはいたが、俺は確かめるようにまた彼の耳に手を伸ばした。

すと思った通り、ひくんと首を縮めて、手から逃げるように顔を横に振った。それでもしつこく耳をくすぐるように触っていると、俺の太ももに当たる見口の股間部分が徐々に固くなっていくのが分かる。

ごくりと唾を飲んだ。そして、おそろおそろ俺は見口にたずねる。

「あ、あのさ…。見口ってもしかして、めちゃくちゃ敏感なタイプだったりする？」

びくっと、怯えたように見口が俺を見た。その後、カタカタと震えながら唇を噛んで、悔しそうに視線を逸らす。

「…ええ！ええそうですよ！生まれつき人より大分敏感なんですよ…！だから誰にも触られないようにしてたのに！どうしてくれるんです！？アンタが変に触るから、もうおさまりつかなくなったじゃないですか！」

けれど恥ずかしがっていたかと思えば、どこか吹っ切れたのか、彼は堂々と自分の体質について認めてきた。なるほど、だから見口は人との距離感も遠く、かつスキンシップも嫌がっていたのかと納得した。軽く触られても声が出るくらいなのだから、気軽にボディタッチをされるのは困るのだろう。

とはいえ、俺だって彼を困らせようと思ったわけではない。最初は善意から始まったし、これは事故だ。どうしてくれると言われても、俺に何が出来るというのだろう。

「いや、これは不慮の事故だろ！俺も知らなかったんだって！」

「明日までの資料作るにも、こんなんじゃ集中できない...！くそっ、アンタの、アンタのせいで！予定が全部丸つぶれだ！ふざけんな！責任取れよ！」

「じゃ、じゃあ...。俺はどうしたらいい？」

一応、少しは悪戯心をもって彼の体に触れた自覚はあったので、事故とは言えども俺にも反省すべき点はある。悪いと思っている分、協力できることは力を貸すつもりだった。だから、このホテル代を全部払えと言われても、抱えている仕事を自分に丸投げされても黙って頷くつもりでいた。

しかしながら、なぜか手際よく俺のネクタイを緩める見口から聞こえてきた要求は、俺の予想のどれでもなかった。しゅるりと音を立ててネクタイが抜けていくのを呆然と見ていると、今度は見口が俺の頬に手を添えて、とんでもないことを言ってくる。

「抱けよ。アンタが俺のこと」

「ああ、わか...、ってええ！？だっ、だっ、抱く！？俺が！？見口を！？」

一瞬、どうせ何を言われても肯定するつもりだったせいで、50%ほど了承してしまった。ギリギリで踏みとどまった俺は優秀と言えるだろう。

抱くとは、そういう意味で合っているのかと、慌てて見口を見た。だが彼は問答無用とばかりに俺のシャツのボタンを外している。なんならその勢いだ、ベルトも外されてしまいそうだ。でも服を脱がされても、あくまで抱くのは俺なのか。でも俺、男は抱いたことがないし、そういう趣味もないんだが。

「ちょ、早い早い早い！脱がせるな！ベルトに手をかけるんじゃない！何、どうということ！？見口だけ抜くのじゃだめなのかよ！？」

「俺ゲイだから。この状態で男が目の前にいたらムラムラする。更井さんの性格はそんなに好きじゃないんですけど、顔はまあまあタイプなんで。さっきから触られ過ぎてもう無理なんですよ。さっさと諦めてください」

「俺はゲイじゃないから、男を抱いたことないけど…」

「知りません。なんとかしてください。大体、誰のせいでこうなったと思ってんですか？」

けれど混乱する俺を適当にいなすと、彼は少し崩れた髪をぐしゃりと上にかき上げた。顔が良いので、何気ない仕草が様になる男だ。そして向こうは向こうで興奮しているらしく、自分のネクタイを外してジャケットを脱いでいた。あまりにも乱暴に進んでいくあれこれに、俺はもう説得する気持ちを捨てて、言いなりになった方が楽かもしれないと思い始める。

そうだ、元はと言えば自業自得。ホテルなんて場所を選んだのも俺。ある意味、彼をムラつかせた原因は全て俺にあると言っていい。ならば受け入れるしかない。とはいえ、実際男を抱いたこともないし、相手は見口だ。彼相手に勃起で

きるかは断言できない。万が一のこともあるぞと、初期段階で防御を張っておく。

「たっ、確かに、色々俺が悪いと思ってるから、協力はするけど…。ぶっちゃけ、勃起するかの自信はない。けど、見口が気持ちよく出せるよう最善は尽くす。それでいい？」

「まあ、勃起しても更井さんが下手って可能性もありますしね。それでいいですからさっさとしましょう。時間が惜しい」

しかし保身のためにそう言えば、なんだか癪な合意をもらった。まだヤッてもないのに下手と言われるのは腹が立つが、最悪抜きでいいと言われたのでよしとする。

淡々としている見口は、俺にも脱げと命令すると、お互いにライブ途中かと思うくらい早急に服を脱いで、素っ裸のままにベッドに移動した。

先にダブルベッドに寝転がった見口は、どうぞと言わんばかりに無防備で、恥じらいが皆無だった。雰囲気などはまるでない。しかも、さらけ出された全身はまぎれもなく男性そのもので、付いているものは付いているし、凹凸が少なく、全体的に筋肉質だ。俺ははたして、この色気がほぼない男を相手にその気になるのだろうか、現段階で心配になる。

けれど、その心配は彼の身体を撫でた瞬間に半減した。なぜなら、見口本人が白状した通り、彼の皮膚は本当に些細な刺激でも敏感に感じ取っていたからだ。おそるおそるわき腹から上に、胸の真ん中を通して首筋の方へ手を這わせるだけで、ビクン、と身体を動かして、すぐに冷静な顔を崩していた。んん、と堪えて

も漏れ出てくる声は、普段の冷淡なものではなく、かなり人間味のある熱をおびている。

「撫でるだけでも感じるんだな」

「そういうの、冷静に言わないでもらえますか？俺だって好きで感じてないですよ」

「こういう、あからさまに性感帯って部分はどうなんだ？」

「ひんっ！？」

だが、自分の体質を知ってなお、俺には気丈に振舞おうとしているらしい。とはいえ、ムードのない状態を続けるのもよくないだろう。気持ちよくなってもらわないといけないので、俺はまず目にとまった乳首を軽く指先で弾いてみた。すると見口は、目を見開いて肩をすくませた後、はくはくと口を2回ほど動かしてから、口元を押さえてそっぽを向いてしまった。

おいおい、なんだその分かりやすい反応は。いつものお前なら「そうですね、そこも感じますね」とドライに返すだろうに。そんな余裕もないくらい感じるのかと思うと、つい口元がにやけてしまう。

「へえ？やっぱり誰しもいい所は見口も気持ちいいってことか」

「んっ、っふ、ふ、う、んんん...！」

「ちょっと触っただけで腰浮いてきてる。声出してもいいんだぞ？」

「ッ、い、いちいち、実況しないでもらえますかっ！」

「喋ってないでもっと気持ちよくしてくれってこと？」

「なっ！？ち、ちがっ、そんなこ、と、あ、んんんううううっ！！！」

くりくりと両方の乳首を指で優しくこね回して、淡く腰を振る彼の動きを楽しむ。愛撫自体は大分弱いものだが、見口は顔を赤くして悶えていた。けれど、ある程度は予想出来る分我慢がきくのか、途中で生意気な事を言ってくる。それを黙らせるのも面白そうだと思った俺は、迷うことなく彼の乳首に吸い付いていた。吸ってから、あ、俺って今、男の乳首をしゃぶっているんだなと頭の片隅で思いはしたが、感じ過ぎて俺の頭を抱えながら暴れる見口を見ていたら、些細なことはどうでもよくなった。

「ひっ！っく、う、うあ、やっ、だ、め、更井さ、それ、それはあっ！」

「んん？舐められんの好き？」

「んあ、あ、ああっ、う、だ、め、吸わなっ、あ、あうっ！いあ、ああ、ダメダメダメ、強い、んんんっ！んんんンンッッッ！！！！」

右に左に身体をくねらせて、どうにか俺の口から逃げようとする見口は、本気で感じているようだ。そんな彼を抱きしめて、自分の口から乳首が外れないように工夫する。ちゅう、と音が立つほど吸うと、セットした髪に見口の指が入ってきて、ワックスで固めた髪が乱れたのを感じた。気遣うこともできないほどに我を忘れる見口は貴重だから、つい調子にのって、今度は吸いながら噛んだり、舐めたりしてみる。これも効果的だったのか、彼の声は高くなり、俺の腹に当たる熱も更に固くなった。上手に感じられたご褒美に、抱きしめた手を使って耳のあた

りを巻き込みながら頭や首のあたりを撫でると、じわりと彼の先端が濡れ始める。

「ふ、うう、あ、あああっ！やあ、もおだめ、しっこい、しっこいですってえっ！」

「でもここガチガチになってる。乳首好き？」

「〜〜っ、そ、そうやって胸だけ責めて、楽しようとしてるんじゃないでしょうね...！」

「いや！？そういうわけではない！」

だが、ぎろりと彼から睨まれて、俺は慌てて体を離した。けれど体を起こした直後に、ということは見口は、しっこく乳首を責めたら胸だけでイキそうなくらい気持ちよかったのか？と疑問に思ったが、今の彼を前にして聞く勇気はない。ここは大人しく下半身の愛撫に、できれば彼の求める「抱く」ことにおいて大きな意味合いを持つ行為へと進んでいくべきだろう。

しかし、そうなる俺も勃起していないといけないんだよな、と思って下を見ると、なんと普通に入れられそうなくらい固くなっていて驚いた。後輩の乳首を舐めて、俺自身も興奮していたらしい。おいおい、感じる体質の見口はともかく、男の乳首をしゃぶって勃起している俺はどうしてしまったんだと冷や汗がでてるが、今回においては見口の要望を通せるので深くは考えないことにする。

しかし、入れるとしてもだ。女とは違って尻に入れるのだろうか、とまでは理解しているが、入れ方がよく分からない。はて、と首を傾げながら、見口に聞いてみる。

「奇跡的に勃起してるから、入れようと思えば入ると思うんだが。ここ、いきなりズブッといって大丈夫なのか」

「あんまり推奨されませんが、俺はある程度慣れてるんで、濡らしてくれたら入ると思います」

すると見口は、ローション使ってもらえばいけるかと、とベッドの側にあったローションの蓋を自分で開けて、べっちょりと孔に塗りたくっていた。犯される側としての恥じらいが皆無な彼を見ていると萎えそうだが、こちらもゴムを付けて準備を整える。見口曰く、両方濡れていた方が痛みが少ないからと、ゴムを付けた俺の熱にもべっとりとローションが塗られた。

人生で初めて抱く男が、まさか職場の後輩になるとは思わなかった。それでも言われたことを全うするため、見口の膝を軽くたてて、すばまった孔に自分の切っ先を当てる。

「い、入れるぞ」

「っ、はい...！」

自分の腿を抱えるように足を広げている見口は、少しだけ緊張しているようだった。緊張しているのは自分も同じなのだが、あまりモタモタしてもいられない。よし、こういうのは勢いも大事だと、深呼吸してから一気に自分の熱を入れていく。

「〜〜〜ッ！！？んあ、あ、あううう.....ッッッ！！？」

入れていくと、途中で何かコリコリするものが当たる感触がしたが、それに構わず行けるだけ奥に進んでいく。慣れている、と言った見口の話通り、意外にもカリの部分さえ入ってしまえば、あとはスムーズに奥まで入っていった。その途中で、どろどろと見口の熱から白い液体がこぼれてきたが、これは入れただけでイッてしまったのだろうか。

「っ、見口...？お、前、今イッた...？」

「あ、ひ、ひぐ、う、あ、あああ...！」

しかしながら見口は、感じ過ぎているのか返答がうやむやだった。もしかすると、俺の声が届いていない可能性もある。はて、彼は今きちんと達することができたのだろうか。それとも、これはイッたにカウントされないのだろうか。なんとも判断しかねる。

それに、抱けと本人から言われているが、一度入れただけで彼を抱いたことになるのだろうか。少なくとももう少し満足出来るまで動くことは必要かもしれない。後々、入れただけで終わったじゃないですかと文句を言われてもだ。奇跡の勃起が2回も起こせるかは断言できないし、それなら臨戦態勢にある今、ちゃんと動いた方がいい。見口はまだまともに喋れないようだが、彼が痛みを訴えていないならいいだろうと、勝手に腰を動かすことにした。

そしてこれは俺にとってのいい点だが、見口の中は想像の10倍ぐらい具合が良かった。へえ、男とするのも意外といいものだかと、自分の順応性に少し驚く。

実際、見口が感じると中も連動して締まって気持ちがいい。これなら一石二鳥とも言えると、俺は彼の様子を観察しながら、激しくない程度に腰の動きを早めていく。

「ふぁ、あゝっ、ま、あ、更井、さ、ちょっと、まっ...！！」

「何？痛いかな？」

「っ、ち、違っ、でも、んあ、あ、今、今はあ...ッ！」

「あ、こっちが中途半端だったからってこと？なら乳首も一緒にするか？」

「んやあっっ！！？」

だが見口は、気持ちよさそうにしているにも関わらず、嫌々と首を振っていた。感じ過ぎるから嫌なのかとも思ったが、よく考えると彼に入れる前に、乳首を弄っていたんだっと思い出す。便宜上、先に進めるために胸を責めるのをやめたが、本当はまだしてほしかったのかもしれない。

体をかがめて、彼の乳首を唇で甘く挟む。軽く吸い付けば、きゅう、と内部がすぼまった。さっき以上に彼の感じる様子が手に取るように分かって、俺も段々と楽しくなっていく。反対の空いている方の乳首もこね回して、中の動きはじっくり突き上げる動きに変えた。すると、見口はぐうっと喉を反らして、掠れた喘ぎ声を上げ始める。

「ひうううう...ッッ！！！！や、あ、どっちもは無理、無理いいっ！」

「両方されたら感じ過ぎる？敏感だといいな、いっぱい気持ちよくなれて」

「んはあ、あ、中、あ、も、いい、そんなにしなくても、う、んううう～～
～っっ！！」

快感がキツくなってきたのか、見口は自分の足から手を離して、俺の肩を押し返してきた。その手の弱々しさが、どうにも儚くて心が昂る。俺を拒むというより、すぎるような仕草に、自分の熱が膨張するのを感じた。大きく息を吐いて、興奮をコントロールする。

けれど一度乳首から口を離して、呼吸を整えながら見口を見下ろすと、これはこれでよくない光景が目に入った。さっきまでは白かった見口の肌がほんのり色づいていて、全体的に汗ばんでいる。ん、ん、と息継ぎの度に喘いでいるせいで、濡れた腹がヒクリとしきりに動く。拒むことを諦めて投げ出された手が、くたりと顔の横に投げ出されていた。その手を無意識に握ると、普段は切れ長で相手を威圧させるはずの目が、とろりとほぐれる。見口が横向きだった顔を正面に向けると、潤んだ瞳が乱れた前髪の間隙から覗いた。

「な、に...？更井、さん...？」

毒気も覇気もない声が、俺の耳に届く。彼の発する音を聞いた瞬間、軽く触れる程度に握っていた手を、思わずしっかりと握りしめていた。そのまま見口の方に顔を近づけて、驚きに見開く目を視界の片隅に捉えながら、衝動的に口を合わせる。ビク、と握った手が一度開かれたものの、彼が俺の行動を拒むことはなかった。

「んむっ！！？ふ、う、ん、んんん...っっっ！！」

軽いキスでは満足できなかった俺は、見口が薄く口を開けた時、無遠慮に舌をすべりこませた。ぬるりと彼の舌を捉えて巻き込むと、下にある身体がガクンと大きく揺れる。おそらく、彼はキスでも感じてしまうのだろう。それはそれで都合だと、俺はまたじっくり腰を動かしながら、片手で見口の後頭部を押さえてキスを続行する。

「んっ！んんんっ！ふ、むっ、うううっ...！ひう、うう、も、やあ、あ、んっ！んんんっ！んんんんうううううっ！！！」

長く続けていると、ぎゅう、と俺を挟むように見口の太ももに力が入って、彼の内部が震え始める。まるで女性が達する時のような感じ方に、どこか興奮している自分もいた。だが、俺達の腹に挟まれる見口の熱からは先走りだけがこぼれているようで、射精の気配はない。もしイッていないのなら、まだ彼との約束は果たされていないはず。なら、もう少しこのまま緩やかな速度で続けてもいいかと、俺はなるべく奥を擦ってやれるように、深い部分を刺激し続けた。

ー続きは本編でお楽しみくださいー